

歴史をイデオロギーで見えてしまう

話し合いでまとまったことは絶対の正義だ、話し合いでは何でも決められるという考え方

正しい神はただ一つしかない、それが造物主である。だから、それ以外の神は全部認めない。

王権神授説…>聖書のどこにも載っていないではないかということで、フランス革命などが起こった

「和の社会」にいるのが「和人」であって、「和」というのが集まってつくっている国が「大和」

皇帝と教皇と天皇

「皇帝」という言葉は、あくまでも中国本土の支配者を示す称号

日本では、中国の下につきたくないということで「天皇」という言い方をした

ローマ帝国の滅亡後のヨーロッパを精神的に支えていたのが、ローマ「教皇」なのです。「法王」とも。

ナポレオンはなぜ「皇帝」かというと、彼はローマ教皇から「皇帝」の冠をもらった

カノッサの屈辱

イギリス国教会

聖書の解釈権

プロテスタント。王とか、貴族とか、教皇とか、人民とかの身分差別があるはずがない。

カトリックの場合は「神父」、プロテスタントの場合は「牧師」

「司祭」「司教」「大司教」「枢機卿」「教皇」

共産主義と無神論はセット

旧約聖書、新約聖書、コーラン

バチカンが聖書に対して解釈権を持つ唯一の存在

釈迦牟尼

生老病死。四苦。無常。空。輪廻転生。

人間は決して死なずにこの六道を輪廻する。天上界、人間界、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄。

四苦八苦。生老病死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰盛苦

煩惱の炎の消えた状態を涅槃。解脱。

悟った人間のことを「仏陀」。

仏教というのはひと口で言うと仏になるための道なんです。

けれど仏になるやりかたというものがはっきり書いてない。

大乘仏教と上座部（小乗）仏教

大乘非仏説。久遠実成の釈迦。

如来。覚者。仏陀。

浄土信仰。阿弥陀信仰。極楽。往生。浄土三部経。四十八願。本願。

識。唯識論。

怨霊思想

顕教。

密教。大日如来。

天台宗の比叡山延暦寺。法然；浄土宗。親鸞；浄土真宗。お念仏「南無阿弥陀仏」。

観想念仏。平等院鳳凰堂＝極楽のパノラマ。

唱名念仏。

禅宗での本尊は一応釈迦如来。

曹洞宗。騷動宗。螢山派と道元派。

日蓮；法華經。此岸。常寂光土。女人救済。お題目「南無妙法蓮華經」。

「折伏」

戒名の意味

「舍利」「仏舍利」。スツパ=卒塔婆。塔は釈迦の教えを象徴するもの。三重の塔、五重の塔。三尊形式。本尊=中尊。脇侍。菩薩。釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来。大日如来。

如来像：螺髪、一重の着物、白毫

菩薩像；髪が長く、まげをゆっている。着物も如来より豪華。

菩薩というのは大乘的な言い方で、小乗的には羅漢。

阿弥陀の意味

天。帝釈天、梵天、聖天、弁財天、毘沙門天。四天王。

仏像：三十二相八十種好。

神道の二本柱；穢れ、言霊

穢れ、禊ぎ、祓い、水に流す

平和念仏主義

「言霊」の社会では不吉なことを言うと不吉なことを望んでいると思われる。

六つの信（イマーン）：アラー、マラク、コーラン、ナビー(預言者)、アーヒラート(来世)、カダル(天命)

五つの行（イバーダート）：シャハーグ(信仰告白)、サラート(礼拝)、サウム(断食)、ザカート(喜捨)、ハッジ(巡礼)

新約聖書は、イエス・キリストが、どうしたこうしたというのを弟子の立場からみて書いたもの
内なる人、外なる人、

catholic 普遍的。全世界を覆う者であると名乗っていた。

スンニ派の主体はアラブ人(セム・ハム系)で、シーア派はイラン人（白人、ペルシャ人）

キリスト教というのはひとことで言えば、イエスがキリスト(救世主)であると信じること。

儒教は根本的に後ろ向き。保守的なところ、古の道のみだりに変えてはいけない。

すべて世の中というのは発展段階があって、古代奴隷制から進んで、最後に共産主義社会になって完結する。これもユダヤ教的考え方なのですが、そういうことを信奉している人たちが歴史学をやっているのです。つまり歴史をそのまま見るよりも、自分のイデオロギーで見てしまうのです。聖徳太子などは名前からして気に入らないわけです。ですから、厩戸皇子というわけです。

それはいいでしょう。歴史を正確に見るということでいえば、生きているとき彼は聖徳太子と呼ばれたことはないのです。彼は厩戸皇子で、死んだ後、神格化されて聖徳太子という名前になったのです。ただし重要なことは、なぜ聖徳太子と呼ばれることになったかということ、歴史学の課題として扱わなければいけないのですが、そうっていないのです。

死刑廃止論というと、日本では単に技術論になってしまうのです。もし死刑になった人が無実だったらどうするのか、死刑でなかったら再審請求ができるけれども、死刑ではできないから、とりあえずやめたほうがいいのだということになってしまう。

外国、特にヨーロッパの死刑廃止論というのは、人間が人間の権利をそこまで奪えるのか、

ということが基本になっています。死刑といえども、それは全員一致で死ぬというのと同じです。人間がつくった仕組みで生存権という基本的な人権を奪う、それは許されない。何人も、たとえ人を殺した悪いやつでも、**人間が人間の基本的人権を侵すことはできない、という考え方が基礎にあるのです。**日本にはそういう考え方はありません。

山本七平さんが面白い例を出していました。宿題を忘れた人間は教壇の前で裸にならないといけないというルールを全員一致でつくって、第一回の適用で女の子が裸にされた。これはいいことなののでしょうか、悪いことなののでしょうかというのです。悪いことに決まっているのですが、どこが悪いのでしょうか、ということで先生方が話し合ったのですが、先生方はどこが悪いのかということをはっきり言うことができなかった。

なぜかというと、十七条憲法的考え方があるからです。つまり話し合いでまとまったことは**絶対の正義だ、話し合いでは何でも決められるという考え方**です。ところが、実際にはいまの例のように、いかに全員一致で決めたことでも、基本的人権を侵してはいけないというルールが厳存するわけです。だからいけないのです。日本人にそのことをいまひとつ説明しにくいのは、キリスト教社会、イスラム教社会のように、神が人間に生命をくれたという考え方がないからなのです。

基本的人権は、神が与えてくれたものだから人間は奪ってはいけない、というのが近代社会の流れです。もちろん日本もその中にいるわけです。しかし、聖書には、神が基本的人権を保障したということが書いてあるかということ、必ずしもそうは書いてないのです。

これはむしろ、近代に至って、ルソーやベンサムが聖書に託(かこ)つけて考え出した理屈ではないかと思います。そのような理屈がなぜ世界中を席卷したかといえば、神というものに対して準拠しているから、説得力があった。**我々は神様によってつくられた、だから神様によってよりよく生きる権利もまた与えられているという考え方**です。

キリスト教というのは以前、ほかの宗教はけっして認めない宗教だったのです。それは造物主という観念に影響されているからです。

たとえば、戦国時代に来たキリスト教の宣教師は「おまえたちは仏というものを信仰しているが、仏というものはどういうものか」と聞く。仏というのは宗派によって違いますが、禅宗などでは釈迦如来であって、釈迦とは紀元前五世紀頃にいたインドの王子であった。つまり、人間であり元はといえば、土のチリではないか。キリスト教世界の日で見ると、日本で信仰している神様は、神も仏もほとんどが土のチリになってしまう。だからおまえたちは間違っている、ということになってしまうのです。

正しい神はただ一つしかない、それが造物主である。ただ一つということと、造物主というのは容易に結びつくのです。だから、**それ以外の神は全部認めない。**それがフロイスら宣教師の事情でもあったのでしょう。

キリスト教が変わったといっても、本質的には排他的な宗教であるわけです。

排他性というと日本人は悪いほうにしかとりませんが、そういう排他性があったので、逆に

人権ということを普及させたという功績があるわけです。

「和」の社会ではそういうことはないのです。話し合いを越えるような基準、話し合いでは絶対変えられないような基準というのはないのです。何でも話し合いで変えられるわけです。逆にいえば、これが日本社会の非常な柔軟性につながっているわけです。

造物主的社会は、本来人間を格付けしにくい社会なのです。そのために理屈を考えるわけです。たとえば、王様はなぜ偉いのか、なぜ頭を下げなければいけないのか。中国では皇帝は天（神様）というものが、人間界をほうっておくと無秩序になるので、特に偉い人間を一人、世の中を治めるようにさし遣わした、それが天の子である天子である、だから偉いのだということにしていました。

西洋社会では、王様はなぜ偉いのか、アダムとイブが耕し紡いでいたとき、誰が領主だったかという考えを持ち出されると困るので、そこで考え出されたのが**王権神授説**です。神様はすべての人間を平等にはつくったけれども、それでは世の中は治まらないので、特に偉いものに王様の権利を神が授けた、だから偉いのだということが中世社会ではいわれたわけです。しかし、それは違うだろう、そんな命令をしたということは**聖書のどこにも載っていない**ではないかということで、**フランス革命**などが起こったわけです

実は、日本の政治家はほとんどそうなのです。汚職事件などが起こると秘書が泥をかぶるということがありますが、秘書も恐らく悪いことをしたとは思っていないと思います。日本の政治は金がかかるのだ、そのために誰かがお金を持ってこなければいけない。それを税金からとるのはいけないけれども、営利企業体から余っている金をもらってきて、それを国政のために使ったのに何が悪いのだ、という考え方なのです。つまり、もらうほうと与えるほうとの間で合意ができています。それを外部の法律がとやかく言うのはおかしい。話し合いでちゃんとまとまっているのだ。法律を破ったこと以外は外に迷惑はかけていない。だからいいではないか、というのがまさに派閥(ムラ)の論理です。

そういうことも実は「和」という思想から出てきているわけです。一人でものを決めないのが「正しい」。日本人というのはこのように、お互いの「和」を非常に重んじるわけです。自分の組織、村、会社、家庭の中で波風を立てないことを第一とする。その中では話し合いで何でも決める。そのとき話し合いというのは、外部の規範（法律）などは無視する。

キリスト教社会やイスラム教社会では、話し合いということをする場合でも、その中に、話し合いでも変えてはいけないことが原則としてあるのです。ところが、日本人はそういう「原則のないのが原則」なのです。そこが他人から見ると分かりにくいところなのです。

みんなと同じようにしなさいと教育された方が多いと思います。人並みというのが日本の教育方針で、人と違ったことをしなさいとか、何か一つ特技を身につける、ということはありません。それは、遡っていくと「和の社会」に行き着くのではないかと思うのです。

「和の社会」にいるのが「和人」であって、「和」というのが集まってつくっている国が「大和」である、そうではないかなと最近思うようになっていきます。それが日本人の理想であるということです。

出雲大社に大国主命(おおくにぬしのみこと)という神様が鎮(しず)められています、この人が「和」の成立に大いに関

係があるのではないかと、そのことが日本神道というものの一つの重大な源流をなしているのではないかと私は思っています。このことは神道のところで述べます。

皇帝と教皇と天皇

中世社会では、まずヨーロッパの全人民の心の拠り所に教皇がいるわけです。その下に各国の王がいます。教皇の下に所属しているわけではないのですが、フランスの国王がいて、イギリスの国王がいて、ドイツは皇帝がいました。

「皇帝」という称号、それから「国王」という称号がありますね。これは**本来、中国語**です。「皇帝」の一番最初の意味は、中国大陸全土を支配する人間のことでした。秦の始皇帝が初めてこれを名乗りました。それまで中国を統一した人は一人もいませんでした。ちょうど日本の戦国時代のように中国大陸はいろんな国に分かれていた。そして全部勝手に国王を名乗っていたわけです。それを秦が全部統一し、いままでにない巨大な政権ができた。その結果、新しい称号がいるようになった。そこで「皇帝」という称号を作ったのです。だからこれ以後、中国全土の支配者には「皇帝」という称号が与えられるようになった。

「王」の本来の意味は、中国皇帝の下に従っている国の代表者、ということです。日本では、中国の下につきたくないということで「天皇」という言い方をした。中国の下につくなら、「日本国王」という言い方をしなければならない。室町時代に足利義滯という人が中国の皇帝に使いを送って、「日本国王」にしてもらいました。皇帝の家来ということです。つまり、それは「天皇」に対抗しようと思ってそうしたわけです。しかし通常は日本は離れ小島だから、相当無礼な称号を名乗っても、中国は攻めて来られないだろうと考え、皇帝に対抗する名前、「天皇」という称号をつけたわけです。

実はローマの代表者もローマ帝国というのがありますので、ローマ皇帝という言い方をします。ここで話はややこしくなるのですが、ローマ帝国の代表者も、「皇帝」と訳してしまったのです。「皇帝」という言葉は、あくまでも中国本土の支配者を示す称号なので、本当は使ってはいけません。英語で言いますとエンペラーですね。エンペラーとは、ローマ帝国の王様のことなのです。

そして時代が下がってきますと、ローマ帝国は分裂して、消滅してしまいます。ローマ帝国の滅亡後のヨーロッパを精神的に支えていたのが、ローマ「教皇」なのです。「法王」ともいいます。教えの世界の「皇帝」という意味ですから、「法王」というより「教皇」といったほうがいいでしょう。かつてローマ帝国において、このローマ「教皇」とローマ「皇帝」つまり「エンペラー」という別々のものが同時に存在していたのですが、政治的な実体としてのローマ帝国はなくなってしまった。ところが、その後、ローマ帝国の後継者、具体的にいえば西ヨーロッパを中心とした社会を統一した人間に対して、ローマ「皇帝」の冠を与えるということが行われました。

その認定権は誰が持っているかといえば、ローマ「教皇」だったのです。ですから単にその

地域で威張っているだけなら、フランスでも、イギリスでも王様なのですが、ローマ教皇に「あいつはローマ皇帝の後継者である」と認められたなら、「ローマ皇帝」を名乗れるわけです。具体的にいいますと、フランク王国を作ったカール（チャールズ）「大帝」がそうです。彼の通称はチャールズ・ザ・グレート、つまり「大帝」であり大きな「皇帝」ということです。

それと、のちのフランスのブルボン王家（ルイ十何世とかいいますが）、そのフランス王家を滅ぼしたナポレオンはなぜ「皇帝」かという、彼はローマ教皇から「皇帝」の冠をもらったのです。政治工作をして、ローマ教皇から、ローマ皇帝の後継者であると認められた形をとっているから、「皇帝」なのです。ブルボン王家はそういうことをしていなかったから、同じくフランスを支配していながら「王様」なのです。

それがまさに今の EC というものにつながってくるのです。EC があるあたり、昔はあそこは一つだった。それがばらばらに分かれてしまったのです。そこに共通的理念の精神的象徴として、ローマ教皇がいたわけです。日本の天皇とちょっと似たところがありますね。

中世のヨーロッパ社会は、ローマ教皇が一方で君臨していて、それとは別に各国王がいる。そんな中でローマ教皇の権威が、どんどん上がってきて、国王が教皇に逆らうようなことをすると破門される。**カノッサの屈辱**という有名な事件があります。破門されたドイツの皇帝が、許しを得るためにローマ教皇の別荘に行って、雪の中で何日も外に立っていたという話です。破門されて開き直れるかという、それができなかった。このように一時ローマ教皇の権威というのは非常に大きくなったのです。

ただし国王のほうもいろいろと対抗した。イギリスでは国教会というものがありました。今ダイアナ妃のことで問題になっていますが、実は、離婚というのは、イギリス王室の伝統なのです。

イギリス国教会というのは、ローマ教皇から離れていますから、カトリックではありません。じゃあプロテスタントかという、プロテスタント的要素はありますが、ちょっと違う。なぜこれができたのかといいますと、ある時、イギリスの王様が一人いまして、この方がどうしても離婚して、別の人と結婚したいと思いました。ところがローマ教皇が許してくれない。今でも非常に厳しいカトリックのところは離婚できません。それならば**イギリスの教会は全部ローマ教皇から独立させてしまおう。そうしてできたのがイギリス国教会**なのです。

イギリス国教会では、カンタベリー大聖堂などは、美術的にみればカトリック的なのですが、内容的にみると新教に近い部分もある。けれど、どちらでもない。イギリスはイギリス独自のものであるとしかいいようがない。まさに国教会なのです。

中世のキリスト教社会では、僧侶だけが聖書をラテン語で読んでいて、それを人民に教えていたのです。**人民は直接聖書を読むことがなかった**。ところが、この聖職者階級の中から、これはおかしい、聖書をよく読んでみても、どこにも王様とか貴族とか人民とかを区別するようなことは書いてないではないか、という疑問が湧き上がってきた。

宗教改革の運動というのは、だから、聖書をラテン語からその国々の言葉に訳す、という運動でもあったわけです。これがなければ宗教は本当に民衆のものにならない。マルチン・ルターという有名な宗教改革者は、聖書のドイツ語訳を初めてつくった。英語版を初めてつくったのは、あまり知られていませんが、イギリスのウィクリフという人でした。

そういうことは、実は神様への冒瀆であると考える人もいました。イスラム教ではコーランという聖書があるのですが、それはアラビア語で書かれていました。今はもう解禁されていま

すが、昔はアラビア語以外には訳してはいけないということになっていました。本当にコーランをやるにはアラビア語でなくてははいけないというわけです。

それと同じことが中世のヨーロッパ社会にもあって、**神様の神聖な言葉で書かれた聖書をラテン語あるいはギリシャ語以外の言葉に翻訳するなんてとんでもない**と考えられていた。しかし、そのほうが僧侶には都合がよかった。僧侶だけが神の教えに触れることができる。人民は分からないことがあれば僧侶に聞きにくる。これが中世の姿です。

聖書には麻薬は吸ってもいいかとか、子供を墮ろしてもいいのか、というようなことは書いてありません。そういう判断はどうすればいいのか。実際に神様がやってきてこうしなさい、ああしなさいと言ってくれるわけではありませんから、聖書の記述から類推して、誰か人間が決めなくてはなりません。それを調べて確定するのを「解釈」といい、それを解釈する権利を「解釈権」といいます。**解釈権は誰が持っているのか**といえば、**中世、西ヨーロッパ世界ではローマ教皇ただ一人**。ロシア正教も独立していますから、ロシア正教の総主教もいるわけですが。

このローマ教皇の解釈権を認めないというのが、いわゆる新教徒、プロテスタントです。プロテストというのは抗議するという意味ですから、プロテスタントというのは抗議者連ということモす。マルチン・ルターとかあるいはカルヴァンという人たちが、ローマ教皇を頂点とした解釈権に対して、

「私は、聖書をこう解釈する。私の解釈を認めろ。弾圧するな」

ということで立ち向かっていったのです。

彼らが一番おかしいと思ったことは、なぜ教皇がいるのかということです。神は目に見えませんが、教皇は中世においては「神の代理人」のように、ほとんど「現人神」のような扱いを受けていたわけです。ところが、聖書では、そもそも人間は泥の塊であった。そういう考え方からいけば王とか、貴族とか、教皇とか、人民とかの身分差別があるはずがない。それなのに僧侶たちは身分を固定化するような教え方をする。

ですから、カトリックとプロテスタント、旧教と新教の教えの一番の違いは何かといいますと、それぞれ独自の「解釈権」というものがある、ということです。それと、もう一つ非常に重要な事なのですが、プロテスタントは聖職者階級というものを原則的に認めない、ということです。

日本人の場合、知らない人が圧倒的に多いのですが、教えを垂れる人のことをカトリックの場合は「神父」、プロテスタントの場合は「牧師」といいます。神父は神と人間の上に立つ特別な階級ですからいわゆる俗人よりは高い道德水準を要求されます。そのため神父は結婚を許されていません。聖職者というのは、すべて独身であるということを要求されるのが、普通の宗教です。聖職者が自分の子供を作ったり、自分の妻を持つと、自分の財産を作ったりしたくなる。そういうことをする人間が、どうして人を救うことができるのか、という宗教の伝統的な考え方があるわけです。これは仏教でも全部共通しています。ですから旧教においては神父は絶対結婚できません。

神父が偉くなると「司祭」というわけです。もうちょっと偉くなると「司教」になり、さらに「大司教」になります。大司教がさらに偉くなると「枢機卿(すうきけい)」、その上が「教皇」です。枢

枢機卿は日本全体を統括するくらいの偉い神父です。階級制があるわけですが、その頂点に教皇が立っているわけです。この人達は一般人と違って、修道院に入って、女も断って、酒も断って、厳しい修行をするわけです。

キリスト教本来の教えからいえば人間に区別はないので、聖職者などは要らないのではないかと、というのが新教（プロテスタント）の立場です。では、新教の牧師は聖職者ではないのかと、いいますと、**牧師はあくまでも信徒の代表**であるわけです。誰かが教会の運営をしなくてはならない、あるいは聖書を読むときに誰か代表者が要る。それが、牧師なのですね。牧師は結婚もできます。

いわゆる共産主義者とキリスト教徒の対立、これは旧ソ連とアメリカ、ヨーロッパとの対決といったほうがいいかもしれませんが、そういうものはかつて世界にあり、実は今もあるのです。共産主義あるいはマルクス主義をいやがる、毛嫌いをする、あるいははっきり言って憎悪する、ということがあるのです。

共産主義と無神論はセットになっているということ、そこが日本人がまず最初に理解しなければいけない点です。無神論とは、神様などというものはこの世にいないという考え方です。あらゆる超自然的存在の否定といってもいいでしょう。共産主義、マルクス主義の基本理念は唯物論になっているわけです。

共産主義必ずしもマルクス主義とは限らないのですが、一番流行している、成功しているのがマルクス主義です。そのマルクス主義は無神論であるということをよくよく認識してください。神を信じてその教えを説く者にとって無神論者というのは最大の許すべからざる敵なのです。キリスト教徒から見て、仏教やイスラム教の信者であるというのはまだ許されるのです。そういうのは、まだ神を信じる心があるわけです。ところが**無神論者というのは神を信じる心もない恐ろしい人間、一言でいうと人でなしであり悪魔である**、そういうふうに見えるわけです。

どうしてそうなるか後で詳しく説明するとして、では逆に共産主義者から見てキリスト教徒はどのようなふうに見えるかということ、彼らから見ると神はもともとないのですから、それに対してお祈りを捧げたり、それを信じたりしていることは、ありもしない幻想に惑わされている馬鹿である、ということになりますね。

日本人の考え方からいうと、神を認める

と、なんだか自由がなくなるような気がしますが、そうではなくて、**神が絶対的に存在するから人間の間**の**不平等はなくなる**わけです。ここで初めて、平等な人間は何をしても自由という、本当の意味の自由が出てくるのです。

たとえば、禅宗系の曹洞宗・臨済宗といった宗派と、浄土宗系の浄土宗・浄土真宗といった系統の宗派とでは、仏様とか、悟りとか、救われ方といったものの考え方がまったく違うのです。それを何じ仏教という名で呼んでいる。これでは分からなくなって当然です。

どうして、仏教というのはいろいろな考え方がいっぱい出てくるのか。キリスト教ではそう

いうことは基本的にはありません。なぜかという、まず教典というものが一つしかない。正確に言えば二つなんですが、旧約聖書と新約聖書というものです。ただしこの「約」というのはいわゆる翻訳の「訳」ではなく、契約の「約」です。

「旧約」というのはユダヤ教の根本聖典でありまして、ユダヤ民族が神、造物主と結んだ契約はこれ一本だけです。

次にこのユダヤ人の中からイエスという人が出てくる。神というものが姿かたちを変えて人間界に現れたもの、それがキリストであると考えられるわけです。このキリストが、今度はユダヤ民族だけではなくて全世界の人々と、契約を結んだ。それが新約であります。だから旧約聖書の後にこの新約聖書というものがある。

この旧約、新約というのは実はキリスト教徒の言い方です。ユダヤ教徒にとっては旧約しかないわけですから旧約とは言わず、単なるユダヤ教の聖典としてバイブルがあるわけです。一方、キリスト教徒は、ユダヤ教の契約に加え、キリストが新たに結んだ契約を新約と言い、従来のユダヤ教の契約を旧約と言うわけです。

実はさらにこの続きがありまして、神が（ずっと同じ神なんです）、今度は別の契約を結んだという発想で出来ているのが、「コーラン」です。これがイスラム教徒なんですね。このイスラム教徒から見ますと旧約というのが第一契約であり、新約というのは第二契約であって、最終的な一番大事なものがコーランであるということです。イスラム教徒は「新約」も「旧約」も教典として認めている。教典というのは、その宗教の根本原理を説いた聖典、ないしはお経とか本という意味ですが、イスラム教の教典の中にはこの二つとも入っているわけです。入ってはいるけれども、これはコーランに比べれば重要なものではない、コーランが一番重要であるということです。

なぜバチカン＝ローマカトリック協会が解釈権を持っているかといえば、それは新約聖書のほうに、キリストの十二使徒の中にペテロという人がいらっしゃって、キリストから最初の教会を作るよう命ぜられているわけですね。そしてバチカンというものは、実はペテロの墓の上に建っている。だから、あの上に建っている寺院はサン・ピエトロ寺院（ピエトロはペテロのイタリア語読み）といいます。そこからバチカンが聖書に対して解釈権を持つ唯一の存在であるということが出てくるのです。

最初に釈迦の仏教からはじめたいと思います。

釈迦は実在の人物です。紀元前五世紀くらいの人ではないかといわれています。北部インド、今日のネパールに生まれました。釈迦というのは部族の名前で、釈迦は釈迦族の生まれです。

仏教のお坊さんがよく、**釈迦牟尼**(しゃきやむに)といいます。**牟尼**というのは**聖書**という意味です。ですから、これは釈迦族の聖書という意味です。

彼がどうして出家したのか。これは伝説ですが、その原因は、四門出遊(しもんしゅつゆう)であるといわれています。

つまり、人間というものは生きている限り必ず苦しみに襲われる。生きることの苦しみがあ

り、病むことの苦しみがあ、老いることの苦しみがあ、死ぬことの苦しみがあ。**生病老**

死です。これを四苦といいます。

彼の王宮に四つの門があって、その門から出るたびに、この四つの苦に、出会ったという。それで、人生というものは無常であると悟る。

どうして、無常になるかという、この世の中のすべてのものが「空」であるということです。

「空」というのは何もないということではなくて、ものはあるけれどもすべては永遠のものではなくて、必ずいつかは、消えてゆくということです。決して何もないということではない。それが「空」というものです。その大前提として、釈迦時代のインド人というものは、輪廻転生(てんしょう)を信じていたということがあります。

この世の中の生物というものは永遠に死なない。永遠に死なないでどうするかというと、生前に良い行いをしていたら良い世界に生まれ変わる。悪い行いをしていたら悪い世界に生まれ変わる。

その世界が六道で、上から天上界、人間界、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄があります。人間は決して死なずにこの六道を輪廻するという。これは仏教の考え方というよりは古代インドの考え方で、仏教というものは、実はそれを前提に始まっているわけです。六道を輪廻するということは、人間は永遠に死なないということです。これを我々はいいことのように考えますが、インド人はペシミスティックというか、厭世的というか、これを苦しみととらえました。生きるということは永遠に苦しみに会い続けることだと考えたわけです。

四苦八苦という言葉があります。前に述べた四つの苦の他にもう四つの苦があって、愛するものと別れる苦しみ「愛別離苦(あいべつりく)」、逆に会いたくない人に会わなければならない苦しみ「怨憎会苦(おんぞうえく)」、お金なり、地位なり欲しいもの、求めるものが得られない苦しみ「求不得苦(ぐふとくく)、それか

らあらゆる感覚があるがゆえに(たとえば暑いとか寒いとか)会わなければならない苦しみ

「五陰盛苦(ごおんじょうく)」、この四苦と生老病死の四苦を合わせて、四苦八苦というわけです。

人間が活着ている以上、この四苦八苦から絶対逃れられない。四苦八苦を逃れられないのにそれを永遠に味わい続けなければならない。人間はどうして苦しまなければならないのか？と釈迦は考えたのです。

千利休でしたか「茶道の極意はあるか」と聞かれて、聞いた人は何か難しい言葉を期待したんですが、「簡単なことです。暑いときはあつからず、寒いときはさむからず、お客様の心になって不満を持たれないようにすればいい。ただし、もしそれができたら私があなたの弟子になりましょう」と言ったという有名な話があります。極意というのは口にすれば簡単ですが、そのくらい実行するのが難しい。

煩悩は燃え盛る炎にたとえられます。煩悩の炎の消えた状態を涅槃(ねはん)といいます。これは梵語(サンスクリット語のことで、お釈迦様の教典が書いてある言葉)ではニルバーナといいます。

同時にそれを「解脱」ともいいます。古代インド思想では人間というものは六つの世界をいろいろと輪廻していく。ところが煩悩を消して涅槃に入ると、この輪廻の輪から抜けるわけです。ある意味で永遠の存在となります。

人間というものは煩悩があるから迷うのである。煩悩を捨て去ればいい。煩悩を捨て去るにはどうすればいいか。この世のことはすべて無常と悟ればいい。それを自分の頭にたたき込めばいい。それが、悟りであり、悟った人間のことを「仏陀」といいます。そして最初の仏陀が

ゴータマ・シッダルタなのです。

仏教というのはひと口で言うと仏になるための道なんです。人間は仏になれば救われる。では仏になるにはどうすればいいかという方法論なんです。

キリスト教では、人間が神様になる必要はない。絶対の神様という存在があり、しかもその神様がちゃんと人間と約束していて、後に救ってくれると言ってるんです。その神様に救ってもらえばいい。キリスト教徒は神様を信じさえすればいいわけです。

ただ必ずしも、信じるから救われる、こちらが信じてやるから救っていただけというわけではないんです。それは宗教の考え方としてはおかしい。これはキリスト教も仏教も同じですが、人間というものは弱く小さいはかないものだから、そういう人間が神様と対等にものを考えてはいけないんです。だけど、とにかくキリスト教のほうでは聖書という教典がひとつあって、その教典に一種の救われ方がちゃんと書いてあるわけです。

ところが仏教のほうでは、基本的には仏になればいい。けれど仏になるやりかたというものがはっきり書いてない。悟ればいいのだ、悟りとはこういうもののだとは書いてはあるけれども、そういうふうになれるにはどうすればいいのか、という点がすっぱり抜けている。そこで、いろいろな人がいろいろなことを言い出したわけです。そこでますますよく分からなくなってきました。そういうことなんですね。

大乘仏教と上座部（小乗）仏教

ところが小乗仏教というのはそうではない（小乗というのは差別用語なので現在では上座部仏教といいます。これは根本分裂の時に小乗的な考え方をしたのはいわゆる長老達であった。つまり上に座っている人達だったので**上座部仏教**というのです。それに対して、大乘仏教的論議を唱えた人達は、どちらかという長老ではないもっと若い僧達でした）。

大乘というのはひとりを救うのではない、みんなを救う、みんな一緒に救われる宗教である。小乗というのは違う、あくまでも救われるためには仏にならなければならない、ひとりひとりが出家して、修行しなければいけないということです。

江戸時代までは、日本人は、大乘仏教は釈迦がいて

いたことだとみんな信じていた。それを富永仲基(とみながなかもと)という学者がいて、『出走後語(しゅつじょうご)』という著書

で**大乘非仏説**を唱え、大乘仏教でいっていることは釈迦がいったことではないということを歴史的に証明しました。ただし、これはあくまで学問の世界のことで、信仰の世界ではいまだに大乘仏教は釈迦が始めたということになっている。

この場合、インドの紀元前五世紀の人間であるゴータマ・シッダルタが釈迦であるとはとらえず、全宇宙的に存在している悟った人間＝仏陀が、たまたまインドの時代にゴータマ・シッダルタという形で現れたのだというとならえ方をします。

そういう考え方を**久遠実成の釈迦**(くおんじつじょう)といいます。日本の仏教の宗派で信仰しているお釈迦様というのは大体こちらのほうです。つまり、インドの個人であるゴータマ・シッダルタではなく、ずっとこの世界に永遠に存在しているような、教祖としての、救い主としての釈迦。

阿弥陀如来

阿弥陀如来も仏陀です。

如来も覚者（かくしゃ・かくじゃ＝悟った者）も仏陀も同じ意味です。仏陀というのは決して一人ではない。なぜ一人ではないかといえば、造物主ではないからです。造物主なら一人です。世界を全部創ったわけですから、一人でしかありえない。

こういう造物主が全世界を創ったという考え方は仏教にはなくて、全世界というものはもともとあるんです。世界はずうっと昔から続いているわけですから、悟った人は必ずしもお釈迦さまだけではなく、ほかにもいるだろう。その中に、自分を信仰すれば自分のいる浄土に生まれ変わらせてあげるよというふうに約束してる人がいれば、とりあえずその人にお祈りすればいい、悟らなくてもいいわけです。

その人がいる浄土に生まれ変われば阿弥陀仏の指導を受けられる。そうすれば煩惱に満ちたダメな人間も悟ることができる。悟りの前段階として、浄土に行こうではないかというのが**浄土信仰**であり、**阿弥陀信仰**です。

で、阿弥陀さんのいる浄土のことを特に極楽という。楽しみを極めたところですね。そこへ行けば四苦八苦もなくなり、同時に輪廻の輪の中からも抜けられるわけです。つまり自動的に解脱もできる。

釈迦において解脱とは自分で悟って自力で抜け出すものだったのですが、阿弥陀信仰、浄土信仰では浄土に生まれることによってその輪から抜け出せるという。つまり、浄土に一度生まれ変われば（このことを**往生**＜往って生まれる＞といいます）ほかの世界に生まれ変わらなくて、しかもその世界で仏陀になれる、悟りが開ける、ということです。

どうして阿弥陀様がそういっていると分かるのかというと、そこが宗教なのですが、そういっているという教典があるからです。これが有名な**浄土三部経**（岩波文庫にも入っている）という、大無量寿経（だいむりようじゅ）、観無量寿経（かんむりようじゅ）、阿弥陀経の三つのお経です。これが浄土宗の人間にとって

は教典になるわけです。

本願

つまり自力でなく、他力で生まれ変わる。その阿弥陀如来が立てた、たとえば自分を信じる者は自分の浄土に生まれ変わらせて仏様にしてあげるよ、というような誓いが全部で四十八あります。それを**四十八願**といい、そのうちの自分を信仰する者は助けてあげるという一番重要な誓願を、特に**本願**といいます。本願寺というのは実はここから来ています。阿弥陀如来の本願というものを信仰するお寺です。

日本には確固たる怨霊思想というものがあります。その根本は何かというと、当たり前のことですが、「霊」というものがあるということです。ところが仏教、特に釈迦の言い出した**仏教は、実はこの「霊」というものは認めていない**んです。なぜかといえば簡単なことですが、人は死ねばすぐに別の世界に生まれ変わる、六道輪廻の中に入るからです。

「霊」は何かと定義すると、**肉体を離れた個性、自我**というものがある、ということです。つ

まり肉体がなくなっても自我みたいなものが残る。ところが仏教ではそれを認めていない。

浄土真宗ではなぜ般若心経を読めないのかということ、これが「空」の思想を語っているからです。「空」というのは、絶対的なものは何もないということですから、阿弥陀如来は絶対的なものであるという考え方はおかしい、となるわけです。認められないわけです。もともと「空」というのは仏教の根本原理であったはずなのに、阿弥陀如来によって浄土を約束されている浄土真宗の中では、すでに変わっているわけです。

また人間というものが六道輪廻するということは、輪廻する主体が在るはずですが、そうすると、それは何なのか、それは霊ではないのか？ という疑問が出てくる。ところがそれは仏教では「霊」ではなく「識(しき)」だと言っている。仏教では実は輪廻転生する主体というものも認めていないのです。

ところが日本は、「怨霊」が絶対にいるという社会なのです。「怨霊」の鎮魂をどうしたらいいのかということはずっと昔から考えてきました。つまり「怨霊」が、飢饉とか疫病とか噴火とかの天災や人災、事故を起こすと考えられていた。すべて「怨霊」の祟りなんですね。それをいかに鎮魂するかが宗教の中で最も重要なテーマでした。

・・・

ところが仏教はそもそも霊を否定している。怨霊鎮魂などということは普通はありえない。ありえないけれども、実に不思議なことに日本の仏教はそういうことを担当するようになってしまった。

・・・

これはもともとこういう考え方ではないかと思います。つまり幽霊は本来存在しないものである。それにもかかわらず現れてくる。それに対して、**仏教のすべては「空」であるとか「無常」であるとかの思想を読み聞かせれば消えるであろう**、と。

「怨霊」は仏教では存在しないはずのものなのに、それを仏教の力で鎮めるといような日本的な期待のされ方をしてしまったわけです。

顕教。明らかにされている教え。仏典を読めば一応教えは分かる。

それに対して本当はもっと秘密の部分の教えがある、というのが「密教」です。如来は一人ではなくいくら出てきてもいい。天台宗ないし特に真言宗のような密教では、**大日如来を一種の絶対神のようなもので(造物主ではない)、如来の中の如来であり、この世の中すべてを統御する如来の中の一つが人間界に現れたときに、たまたま釈迦如来になったと考える。**

奈良の大仏様は正式には毘盧遮那仏(びるしゃなぶつ)といって、毘盧遮那仏が発展すると摩訶(大きいという意味)毘盧遮那仏となる。摩訶毘盧遮那仏が大日如来です。だから奈良の大仏は大日如来になる直前の形である毘盧遮那仏であるということです。

天台宗とは密教というより一種の総合大乘仏教である。

浄土宗と禅宗は実は考え方が正反対なのです。だから浄土宗系のお坊さんの話を聞いて、次に禅宗系のお坊さんの話を聞くと何が何だか分からなくなってしまう。

法然が、これは中国にもあるんですが、日本の浄土宗というものを考え出した。それはもとをいえば天台宗です。**法然**という人は**天台宗の比叡山延暦寺**にいたのが、浄土宗の考え方を広めたくて山をおりてきた。で、浄土宗を開いた。その弟子に**親鸞**がいて**浄土真宗**を開きました。それとはまた別の浄土宗系の系統で時宗というのを一遍が開きました。

中国の浄土教における念仏と

いうのは「**観想念仏**」です。それは、日常あらゆる機会をとらえて阿弥陀如来のいる極楽のことを頭に思い浮かべなさい、ということなんです。それをずうっと考えていれば、死ぬときも最後まで極楽浄土を念じていれば生まれ変われますよ、それが観想です。念仏というのは観想のことである、というのが中国の考え方です。

・・・

実は「**観想念仏**」というのは、非常に芸術というものを刺激するものなのです。十円玉の模様にもなっている**平等院鳳凰堂**は、こうした発想から考えられている。つまり、観想念仏の行者にとっては、できるだけ極楽を連想させるようなものがあつたほうがいい。死ぬ時に阿弥陀如来が迎えにきてくれるような仏画であつたり、仏様の像があつたほうがいい。それが極端になると、長後に、この世にそのまま**極楽のパノラマ**のようなものができれば一番いい。それが平等院鳳凰堂なのです。

暇人であり金持ちでなければできな

い観想念仏ではおかしいのではないか。本来誰でも救ってくれる大乘の趣旨に反するではないか、ということで考えたの「**唱名(しょうみょう)念仏**」です。

つまり、念仏というのはそんな面倒臭いことをしなくてもいい、阿弥陀仏の名前をただ唱えればいいのではないか。「南無阿弥陀仏」といえばいいんだ。

なぜならば、阿弥陀如来の誓いというものは非常に偉大ではないか。こんな偉い仏さんが、救ってやると言っているんだから、ただ単にその力を信じて「南無阿弥陀仏」と唱えればいい。

道元という

人は中国へ行って、人間というのは必ず出家して自力で修行しなければならないということを学んできた。そしてその**修行の手段として持ってきたのが座禅**なんです。

つまり道元の開いた曹洞宗においては、自分の力で悟りを開かなくてはならない。誰かに頼ってはいけない。そこが違うんです。禅宗のほうでは自分の力で悟りを開くことをあくまで基本としている。従って**禅宗での本尊は一応釈迦如来**です。ただし、崇拝しているわけではない。

道元自身は、自分の仏教は釈迦の教えを継ぐ正しい仏教である、釈迦から直接教えられたものであると信じていました。

一番最初に開祖としての釈迦がいて、途中に達磨大師（南インドの实在の人で、「面壁九年」といわれるように、洞窟の中で座禅をして、壁を九年間見つめていて悟りをひらいた。しかしその間に両手足が腐って落ちてしまった。だからダルマさんはあの姿になった。良く見ると、古いタイプのダルマさんは耳に金のイヤリングをして、顔もインド人の顔をしています）がいて、達磨からずっと教えを請うて、中国のお坊さんに伝えられ、その中国のお坊さんから、我々は習った。だから我々は釈迦の正統なる弟子であると道元は言っています。

・・・

曹洞宗というのは不思議な宗派でして、**総本山が二つある**んです。いわゆる永平寺と横浜の鶴見にある総持寺（昔は能登にあった）が二つとも同格の大本山ということになっている。こんなことは他の宗派には一切ないんです。

・・・

いまでも曹洞宗は別名、騒動宗といわれて完全に瑩山派と道元派の二派の分立があるわけです。

徳川家康が檀家制度を作った。

ところが法華経には、法華経を信じ、それを広めることに努力した人間は必ず救われると書いてあります。女人救済ということが書いてあります。だから日蓮はこれが一番正しいと信じ

ました。もう一つは、今までの仏教はすべて彼岸主義でした。彼方の岸ということです。もっと正確にいうと、あの世ということです。これに対してこちらの世のこと此岸(しがん)こいいます。

彼岸主義では、来世にどうなるのか、来世に救われるのか、極楽に行けるのか、ということが基本になっていて、では今生きているこの現世ではどうするのかということが書いてない。法華経では今生きているこの世が即浄土になる、**常寂光土**(じょうじゃっこうど)といいます。なぜそうかといいますが、法華経には実は、お釈迦様は死んでいないと書かれています。

「南無」というのは「ああ」という呼びかけ。

法華経あるいは日蓮宗では、どうして自分たちがよくて他がいけないのかということ、間違った教えを信じている人の所に行って説得して考えを変えさせなければいけない。それを「折伏(しゃくぶく)」といいます。

これはキリスト教でも使う言葉です。

・・・

日本の宗教の中で「折伏」を非常に熱心にやるのは日蓮宗であり、創価学会です。

・・・

いわゆる公明党が作られたのも、もともとは日蓮宗を国教的な立場に置くことが正しいのだ、そういう考え方が基礎にあったと思います。

戒名の意味というのは、死んだ時に仏の弟子にして貰うために仏戒を授けて貰った、その証に各乗る名前というのが建前です。

それはインド仏教にもないし、中国仏教にもないわけで、日本で勝手に作ったわけです。だから、自分で勝手に戒名を作ってもいいわけです。今のお坊さんは戒名料ということで法外なお金を取っている。

ちなみに浄土真宗では戒名とはいわず「法名」といいます。

仏像の起こりということでは、仏足石の前にさらに歴史があります。それは何かというと、釈迦の遺骨です。仏教では釈迦を火葬にしたものですから当然遺骨が取れます。その遺骨のことを「舍利」といいます。舍利というのはサンスクリット語です。特に、仏様の舍利なの「仏舍利」というのです。ちなみにヒンズー教は火葬にしません。ガンジス川に投げ込むのです。

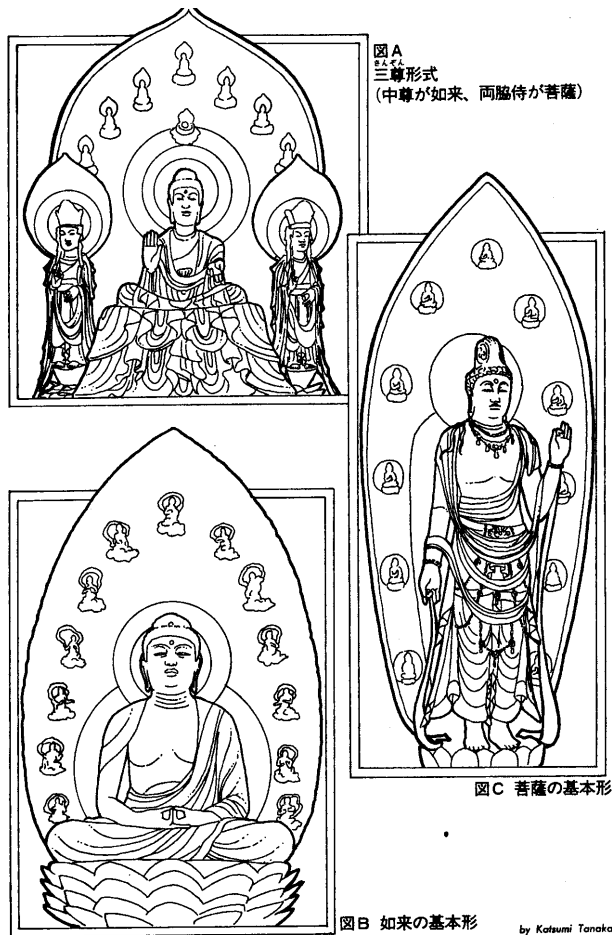
昔のインドでは仏舍利を納めるお墓は、日本の古墳のようなドーム形で上に小さな塔を建てました。これをスツパといいました。これを音訳したのが卒塔婆です。卒塔婆は今でもお墓に行くと立っています。

つまり古代、塔というものには、お釈迦様が眠っているのだ、舍利があるのだということで、象徴として信仰してきたわけです。それは仏像以前です。最初のうちは仏舍利が入っている塔だけだったのが、とにかく塔は、釈迦の教えを象徴するものだということでどんどん建てられました。

日本に来たら三重の塔になり、五重の塔になったわけです。

お寺の仏像は、三尊形式といって基本的に図A（一四九頁参照）のようになっています。

真ん中に本尊、別名中尊があります（中尊寺というのはここからきています）。これは大体如来です。両脇にあるのを特に脇侍（わきじ）といいますが、脇侍は一般に菩薩です。如来は何度も言っているように悟りを開いたいわゆる仏陀です。基本は釈迦如来なのですが、日本のお寺はあまり釈迦如来を祭っていません。釈迦如来を祭っているのはむしろ自力的なものを大事にする禅宗のお寺です。



如来様をたくさんあげてみれば、釈迦如来、阿弥陀如来、それから薬師如来（これもポピュラーですね）、それから、大日如来。如来とは悟りをひらいた者という意味です。ただし大日如来は他の如来とは性格が異なります（このことは後で触れます）。如来像は基本的にはインドの王子である釈迦をモデルにしています。

まず頭が奈良の大仏や鎌倉の大仏のように天然パーマです。これはやはりインドの風俗です。インドの人が頭を剃る、そしてしばらくたつと髪が伸びてきてああいう頭になるのです。これを螺髪(らほつ)といいます。そして如来はほとんど裸で一重の着物しか着ていない。彼はすでに悟ったわけですから現世の物欲とか執着からは離れている、だから着の身着のままでいいわけです。いわゆる座禅の座り方で座っています。そして目があって、この中央に輝くものがあるわけです。これを白毫といいます（図B参照）。

だいたいここに宝石が入っています。

菩薩像は、出家する前のインドの王子の時代の釈迦がモデルです。将来如来になる資格を持ったもので、現在は悟りを開いていなくて、修行中です。ただし、人間よりは遥かに偉いのです。髪が長く、まげをゆっています。そして宝石を付けています。イヤリング、ブレスレット、ネックレス。そして着物も如来より豪華な物を身につけていることが多い（図C参照）。また地蔵菩薩は僧形で袈裟を着けていることがあります。

なぜ如来の両側に立っているかという如来を補佐するというものもあるのですが、こちら側にいる人間と偉大な真理を体得した如来との間を仲介するという意味があるんです。そういうことで仏教では三尊形式で祭っていることが多いのです。

また菩薩の中にも実は非常に偉い菩薩がいる。あくまで菩薩なんだけれど、如来級の菩薩である方が後に出てくるわけです。そして主体として信仰されるのです。

たとえば、観音菩薩（＝観世音菩薩）は、本来悟りを開く力は持っているのですが、悟りを

開いて彼岸に行ってしまうのでこちらの人を救うために敢えて留まってくれている。

ですから菩薩クラスになると脇侍なしの単体で祭られることが多い。如来の場合、一段下の仏像を脇侍に祭ればいいわけですが、菩薩の場合一段下というのを祭ればいいのかちょっと困るわけです。ですから祭ってないケースが多いわけです。

禅宗では真ん中は釈迦如来と呼ぶけれど、脇侍を菩薩という言い方はしない。**菩薩というのは大乗的な言い方で、小乗的には羅漢**といいます。五百羅漢なんてありますが、如来になるための修行の途中の人＝羅漢様は、坊さんの形であることが多い。あるいは真ん中を釈迦にして、両脇に釈迦の十大弟子である、富楼那(ふるな)とか、舍利弗(しゃりほつ)を置くケースもあります。

釈迦如来の場合は文殊菩薩・普賢菩薩。

阿弥陀如来の場合は観音菩薩と勢至(せいし)菩薩。

薬師如来の場合は日光菩薩、月光菩薩。

大日如来

いままでいったのは、顕教の仏様です。これが密教になりますとちょっと違ってきます。

大日如来というのがあります。仏教というのは、なんと如来が多く、ごちゃごちゃして困ると思った方も多いと思いますが、そういうことは昔の人も考えたようです。

では如来の中の如来を作ろうということで考えられたのが、**大日如来**です。つまり大日というのは太陽のことで、太陽のようにあまねく世界を覆っている如来であります。

仏教の宇宙論では、だいたいにおいてこの世界だけでなく、浄土もあるし畜生道も、地獄道もあるいろいろな世界がある。それぞれにすべて如来がいるはずだ、その如来というのは、われわれの世界では釈迦という形を取って現れた、というのがそれまでのお釈迦様との関係でした。しかし、**実は釈迦というのは我々の世界に現れた時の仮の姿に過ぎないのであって、実際その根源は大日如来なのだ**という考え方をするようになったのです。

だから大日如来は普通の如来とは違うのだという考えから、今まで言ったような祭り方はしないのです。普通は三尊形式ですが、京都の東寺というお寺では、上からみるとさいころの五の形に祭られています。高野山の塔もそうですが、**真ん中に大日**がいます。周りも**全部如来**なのです。普通は三尊だと真ん中に如来がいて両脇に一段下の菩薩を置きますが、大日如来の四方を固めるのも如来なのです。

たとえば阿弥陀如来が周りのほうにいたりする。しかしそれを阿弥陀如来とは言わないのです。

阿弥陀如来というのは原語が**アミターエス**といいます。これはサンスクリット語です。その頭の三字を音訳したのが阿弥陀です。

この**阿弥陀**というのはどういう意味かと言いますと、**無限の光**あるいは**無限の幸い**という意味です。そこで意味を訳せば無量寿、あるいは無量光となります。

密教のほうでは、**無量寿如来**あるいは**無量光如来**といいます。他の宗派が**本尊**として信じているものを周りに従えています。大日如来は本来なら悟りを開いた人なので飾りは必要ないはずなのですが、よく見ると王冠をかぶっています。それからイヤリングやネックレスをしています。つまり如来でありながら菩薩形をとっています。これは偉いからです。

密教ではこの如来が別の形になることがあります。悪いものをやっつける時にはこの形では

まずいということで、如来は化身します。

変わった場合の恐ろしい姿を明王といいます。その中で一番偉いのが不動明王です。不動明王というのは実は大日如来と同体なのです。不動明王はすごい恰好をしています。半裸で日は怒っています。片手に刀、もう一方の手には網を持っています。

あれは実は悪を滅ぼして正しい者を助ける意味です。すごい恰好をしているだけです。

...

ヒンズー教の最高神はシバですが、その化身がいつのまにか大日如来と同じ者だということになりました。

頭教である仏教では、ヒンズー教の神を仏教を守る守護神であるとししました。それを総称して天といたしました。

たとえば帝釈天、梵天、聖天(しょうでん) (歓喜天ともいいます) あるいは弁財天、これらはみんなインドの神様でした。これらを仏教の教えのほうが正しいということで帰依した。帰依した後は改心して仏教の守護神として祭られている。たとえば四天王も天です。毘沙門天もインドの神様でした。あくまでも菩薩や如来から比べると格はずっと下です。

仏像には「決まり」があります。如来像についていえば、悟りを開いた人はこういう恰好をしているだろうという規則があります。それが三十二相八十種好です。この中に足に描かれている模様のこととか、キラキラした体（そのために金箔を貼らなければならない）のこととかが決められているのです。

◆Lesson 5 神道

神道の二本柱；穢れ、言霊

日本人の印象でいくと神道とは神憑(かみがかり)的で狂信的なものである。戦前の国家神道の印象がある方は、特にそう思うのでしょうか。昔はバスが靖国神社や護国神社の前を通ると英霊のために敬礼してくださいと言われたそうです。

穢れ

どうして他人のを使いたくないかという、他人の使ったものは何となく汚いような感じがする。「何となく」です。

日本書紀や古事記にも死の「穢れ」ということが載っています。死の「穢れ」を払うにはどうすればいいのか。その手段を「禊ぎ」といいます。「禊ぎ」というのはどうすればいいのかという、日本書紀など実例に当たってみますと、大体綺麗な水の中に入れば「穢れ」は取れる、と書いてあります。

そこで出てきたのが日本人の十八番と言える思想なのですが、「水に流す」ということです。

つまり何でも水に流す。「穢れ」は単に死の「穢れ」ということだけでなくもっと範囲が広いのです。

たとえば怒りとか、憎しみとか、恨みも全部「穢れ」なのです。「穢れ」は全部水に流すと人間は良くなるという考え方が神道の中にあるのです。

(アメリカ) たとえば

アイスホッケーで反則を犯しますと、ペナルティーボックスというのに入れられますね。そして、出てきたときにあいつはペナルティーを科された前科者だからと、差別をすることはありませんね。それと同じように社会におけるペナルティーボックスに入ってきた、**ペナルティーさえ果たせばあとはいいんだ**という意識があります。

日本人というのはどうしてもそういうふうにならないのです。あいつは罪を犯してきた人間だというのでどうしても社会的な差別をします。それがひとつは暴力団の温床になっています。

つまり普通の社会で雇って貰えないので、そういう人間同士固まるということになるのです。どうしてそうなるのかといえば、それは**「穢れ」というものがある**からです。「穢れ」は理屈では消えない。科学的なものでは消えないからです。

・・・

少なくとも一般の人たちは刑務所に行ってきたから禊ぎは終わったとは思わないわけです。思わないから穢れていると思うわけで、差別するわけです。

なぜ葬式はお坊さんの専売特許になってしまったのだろう。一応神道でも葬式をやることはやるのですが、日本人にとって**「死」とは一種の「穢れ」**なのです。たとえば、葬式から帰ったとき塩を撒くのは清めです。死というのも一種の「穢れ」である。だからその「穢れ」を普通の人間が扱いたくないのです。死というものにできるだけ関わりたくない。だからそういうことは別の階層の人間にやって貰いたいという伝統的な考え方があります。

実はこれが身分差別につながってくるのです。人に非ざる、ということです。死体の首を切るとか、切った首を片づけるとか、死体を埋めるとかそういうことは穢れることであるから、誰か自分以外の人間にやって貰いたい。そのために特別の階層をつくってやらせようというので出てきたのが身分差別の考え方なのです。

「穢れ」をなくすことを清めるといいます。清めるための手段が**「禊ぎ」**であり、「祓い」があります。「禊ぎ」とは日本においては綺麗な水の中に入って「汚れ」を流すということです。つまり「水に流す」ということです。「水に流す」というのは日本人がいちばん好きな「穢れ」の清め方です。

「言霊」の定義は言葉に霊的な力があるという思想です。言葉と言葉によって示された内容を現実化すること。

「言霊」の社会では言ったことに呼応して何かが起きるわけです。起こって欲しくないことは言うてはいけないわけです。

・・・

日本はこ

のままアメリカと戦争すると負ける、とジャーナリストなり学者なりが真剣にデータを検討して結論を出しても、それを発表すると、「あいつはアメリカに負けることを望んでいる奴だ」ということになってしまいます。

・・・

日本を愛している人間が愛国心を持って発表しても、「あいつは日本が負けることを望んでいる奴だ、とんでもない奴だ、非国民だ」と言われます。というわけで日本ではこういう意見は発表できなくなってしまう。

言霊の生きている社会では、本当の意味の言論の自由はないのです。

バックナンバーを読む時間がある人は読んでみて欲しいのですが、湾岸戦争が起こる前に、日本のマスコミで、湾岸戦争が起こると言っていた新聞は、まずなかったと思います。では外国の新聞、マスコミ、テレビ報道等はどうかということ、これはほとんど、起こると言っていました。どこが違うかと言うと、そういう時にしばしば言われるのが、日本人にはデータ収集能力がないのだということです。私はそうは思いません。データ収集能力はあるのです。あるのですが、**良心において、戦争など起こって欲しくないと思っているもの**ですから、これは**戦争が起こりそうだな**と思っても**そうは書かない**わけです。「九割方戦争が起こりそうだな」と思っても「まだ、回避の可能性がある」として「開戦必至」とは書かないのです。書かないことでなんとなく良心を満足させてしまう。

日本人は起こって欲しくないことに対して、

どうしても書きたくないという心理的抵抗が働く。自分が書こうが書くまいが起こることは起こるはずですが、日本人はそう思っていないわけですから、どうしても、**事実をねじ曲げて報道**してしまうわけです。残念ながら日本の報道は常にそういうものだと思っていたほうが間違いはないと思います。

言葉が現実と呼応しているということは、本当は現実を改革しなくてははいけないのに、時々**言葉だけ言い換えて改革したつもりになる**というようなことが起こるわけです。

軍部が良く使った言葉で「日中戦争ではない、支那事変だ」あるいは「全滅ではない、玉砕だ」あるいは「退却ではない、転進だ」とか、挙げ句の果てには「これは敗戦ではない、終戦だ」というように、**言葉だけを変えてごまかす**ということが必ず起こるわけです。

(バイウオーター予測) 当時のまともな歴史家兼海軍専門家が将来を予測すればたぶんこうなるであろうということを行ったわけですが、残念ながら日本人は大反発して、バイウオーターに対する反論として『アメリカおそるるにたらず』という本を出し、それがベストセラーになりました。子供達も読んで影響が大きかった。だから笑いごとではないのです。結局その内容というのは、実際的な反論でも何でもなく、感情的な反発でしたが、そういう本が受けたわけです。日本が勝つと言えれば日本が勝つことを望んでいる立派な奴だということになり、日本が負けると言えれば、それはどんなに愛国心から言っても、あいつは非国民の敗北主義者だ、ということになります。調子のいい論理のほうが勝ってしまう。そのことによって国を誤る可能性も実際にあったし、これからもあるといえます。これは言霊の最大の問題の一つです。

「言霊」のいちばんいけないところは、非現実的になることです。つまり、全部言葉の問題になってしまうことです。差別をなくすためには差別語を消せばいい。差別語を消すことで何となく差別がなくなったような気がする。逆に世界平和を実現するにはどうすればいいかという、平和、平和と言っていればいい、平和憲法を守っていればいい。

日本人だけが平和憲法を守り、あるいは平和、平和と言っていれば世界は平和になるのか、真面目に考えてみると決してそうではないと思います。

・・・

平和憲法を守る守らないは日本人だけの問題です。日本人がいくら平和憲法を守っても、他の人が守らなければ、意味はないわけです。それなのに**なぜ平和憲法を守れば平和になる**と思っているのかというと、それは**言霊主義**だからです。「言霊」主義以外の何物でもないわけです。

司馬遼太郎さんはこれを「**平和念仏主義**」と言っています。念仏とは、仏を念じれば仏が来てくれて幸せになる、ということです。日本人は念仏が大好きだから平和に関しても念仏を唱えるわけです。

日本人の結婚の時にいうのは祝詞(のりと)です。祝詞というのは死とか病とか不吉なことは一切書いてないのです。良いことだけ書いてあります。

「言霊」の**社会では不吉なことを言うと不吉なことを望んでいると思われる**。だから、縁起の良いことを頭から終わりまでいうほうがいいわけです。だから祝詞は成立する。日本人の書いた契約は大体祝詞になってしまう。

・・・

日本人の契約というのは、一枚のぺらぺらの紙になってしまうわけです。おめでたいことしか書いてなくて最後に何かトラブルがあった時には、双方が誠意をもって話し合うとか書いてあるわけです。これは西洋では成立しないやり方で、双方が誠意をもって話し合う保証はどこにあるのだ、相手が悪意を持っていたらどうするのか、というふうに西洋人は考えますね。

イスラム教の開祖は

マホメットだ、という言い方をしますね。我々にしてみればこれは事実なのですが、彼らにしてみればこれは違うのです。彼らの信じている神様もキリスト教の信じている神様と同じ造物主なのです。ただし彼らは、アッラー、アラーといいます。

彼らにしてみればキリスト教はイスラム教の前段階であって、彼らはイエスも認めるのです。ただしイエスを神としては認めません。預言者として認めるのです。

預言者とは本当は神の言葉を預かった者という意味です。神は直接民衆に語りかけたりはしません。モーセの頃に一遍か二遍あっただけでほとんどしない。どうするかというと、人間の中に特別な人間を選んで、その人間に言葉を預けるのです。

そしてその人間によって「神様はこう言っているんだよ」ということを伝えさせるわけです

たとえば、

向こうの女性は**チャドル**というものをかぶらなければいけない。砂漠の気候の問題ではないのです。特に人妻はそうですが、顔や体の線は隠さなければいけない。

これもキリスト教的考え方に基づくのですが、要するに、神様は人間を超越した遥かに偉大なものである。その偉大なものを人間が作ったのなら、人間の技量で止まってしまうことになります。そういうものを人間が作ったり、**絵姿にしたりすることは、神に対し失礼であり、重大な冒瀆である**ということなのです。

彼らの神殿、信仰の対象はどうなっているのかといえば、メッカというところに**カーバ神殿**という石の塊のようなものが立っています。立方体のような形をしているのですが、これは場所を示すためだけの立て札のようなものです。それに対していろんな教会にあたる寺院のようなものがあるのですが、中に入ると画像とか絵姿、神像は一切ないのです。アラーの像とかマホメット像が一切ないのです。祭壇のようなものがあってそこに対して礼拝をするのです。だから**神像があるキリスト教はまだ不完全だ**ということになるのです。

もう一つは**イスラム教はものすごい戒律宗教**なのです。戒律というのは、酒を飲んではいけない、豚肉を食べてはいけない、死肉を食べてはいけない。そういうものが、コーランの中にたくさん規定してありまして、**全部正しく守って行くことが、神様の信仰になる**のです。

...

つまり神様の下した命令であるから、それを全部守るのが、大切なのです。日本人が疑問に思うのは、本当は神様を信じていなくても、外見だけでそんなことをやっている人がいるのではないかと思うのですが、彼らはそういう考え方をあまりしない。**まず外側の戒律をしっかりと守らねばならない**というのが**イスラム教の基本的な考え方**です。

六つの信 (イマーン) : アラー、マラク、コーラン、ナビー(預言者)、アーヒラート(来世)、カダル(天命)

具体的に言うと六つの信、五つの行というものがあります。イスラム教徒である以上、六つ

のことを信じなさい。五つのことを行いなさい。信のことをイマーンといいます。そして行をイバーダートと言います。

六つの信を順番に言いますと、まずアラーという神がいることを信じなさい。これがまず大前提です。この世界の創造主である、唯一の神様がいることを信じなさいということです。

次に、マラク、天使。

旧約聖書に出てくる大天使ガブリエルも、マホメットにいろいろなことを啓示したといわれています。神様ではないけれど神様の使徒である、人間とはちょっと違う存在、超越的な力を持った人達がいることを信じなさいということです。それがマラクです。

次は、コーラン（聖典）です。原語ではクルアーンといいます。

...

四がナビーですね。ナビー、これは預言者のことです。

コーランを伝えた人間達のことを預言者といいます。預言者は正しいのである。預言者を信じなさい。そしてそのイスラム教というのは、キリスト教はイスラム教の前段階であるという立場を取っていますので、預言者の中にはいわゆる聖書の中に出てくる人達も入ってくるのです。アダム、ノアの箱船のノア、アラブ人とユダヤ人の祖であるアブラハム。それからモーセ、その後にイエスが来て、最後にマホメット。ただし、イエスはキリスト（神）ではない。預言者の一人である。マホメットも偉大な人間であるが、あくまで人間である。人間であって神ではない。だからマホメットの神格化などしてはいけないわけです。

アダムから最大の預言者マホメットまでその実在と主張（つまり神の言葉）を信じなさい、ということです。

五は、アーヒラート。

これは来世です。イスラム教にも最後の審判はあるのです。イスラムの信仰と戒律をちゃんと守れば、天国へ行ける。具体的には一日に何回礼拝しなさいとか、豚肉は食べてはいけないとか、妻は四人までしか要ってはいけない、あるいは断食を必ず一年の内一回はしなさいとか、コーランに書いてあることを守れば天国のような所へ行ける。そのことを信じなさい。

イスラム教の教えを守るために死ねば、やはり天国に行けます。殉教ですね。

その次がカダル、天命です。

この世界に起きるいろんな現象、人災であろうが、天災であろうが、いいことであろうが悪いことであろうが、それはすべて神の、アラーの意志に沿ったものである。要するに神の意志以外で物事が起こることはないということです。

これがイスラムの六つの信です。

五つの行（イバーダート）：シャハーグ(信仰告白)、サラート(礼拝)、サウム(断食)、ザカート(喜捨)、ハッジ(巡礼)

イバーダートとは五つの行です。

最初がシャハーグ、信仰告白です。

私はイスラム教の信者である、「アラーは唯一の神でありマホメットはその使徒である」ということ、神を信じているということをいつも事あるごとに人に宣言しなさい。私は心の中では信じているけれども口には出さないというのはダメなのです。仮に暴虐な領主がいて、イスラム教の信者は殺すと言っているようなときにも、シャハーグはしなければならぬ。もしその時にシャハーグをして、死刑になるようなことがあったら、それは殉教になるわけです。こ

の殉という字自体に死ぬという意味があります。**教えのために死ぬ**ということです。それは**天国に行ける**ということです。とにかくシャハーグということは非常に重要なことです。

そして、サラート。言うだけでなくもっと神様を信じているということを形にしているのが、このサラート、礼拝です。必ずメッカのほうを向いて行きます。メッカはイスラム教の聖地であって、マホメットが神の啓示を受けた場所です。イスラム教の信者は世界中どこにいてもメッカの方向を認識していなければなりません。そして一日に**五回サラート**をしなければなりません。

・・・

それから**サウム、断食**です。

これはなぜやらなければいけないのか信仰上の根拠はよく分からないのですが、とにかくやるということになっています。イスラム暦の第九月、九番目の月にやります。向こうは太陰暦つまり月の暦を使っています。太陰暦は1年間三百五十四日ぐらいで、太陽暦と十一日ずつずれていくわけですから、第九月というのはその年によって違うわけですね。ある年は秋であったのが、翌年はもっと冬に近くなり、さらに廻ると夏になったりということもあります。**水も飲めないわけですから、熱帯での夏の断食は大変**です。

この断食をやる月、第九月のことをラマザンといいます。そのラマザンの月は、ちゃんときっちりやろうとすると、その一月の間、黎明時、日の出前のちょっと明るくなりかけるかなという時から、日が上って沈むまで、**水も煙草もいっさいダメ。勿論食物もダメ**。太陽が沈んでからはじめて食事がとれる。そういうことを一月間やらなければならないわけです。

それから、四つ目は**ザカート**。

これは**喜捨**ということです。施しといったほうが分かりやすいかもしれませんが、施しという偉い人間が下等な人間にやるというニュアンスがあります。喜捨というのは、よく日本人が旅先で怒ることで、イスラム教系とかヒンズー教系の貧しい国に行くと物乞いをしてくる。施しをしてあげたのに、有り難うの言もいわない。あいつらはとんでもない劣等民族だと言ったり書いていたりする人がいます。

しかしこれは向こうにしてみれば、俺はあなたにザカートのチャンスを与えてやったのだぞ、というわけなのです。つまりザカートというのは、信仰の、神の道に沿うことで絶対にしなければならないものであるわけですね。満たされている人にあげてもザカートになりませんから、貧しい人にやらなければならない。そうすると**貧しい人の論理として、豊かであるあなたにザカートのチャンスを与えてあげたのだから、お礼をいう必要はない**ということになります。イスラムに対して、国が国を援助する時でもザカート的な考えをすることがある。日本人はものを貰ったらお礼を言うのは当然だという考え方をしますが、世界に行くと必ずしもそうではありません。

ついでにもう一つ、日本人がイスラム教徒に腹を立てるケースがあります。それは特に**アラブ人（イスラム教徒）は平気で嘘をつく**というものです。実際、道を聞いたら全然違う方角を教えられたとか、頼みもしないのに「その件は任せておけ」と言われ、何もしてくれなかったということがよくあるのです。

これも実はザカート的な考えなのです。道を教えてくれと言われて「知らない」「分からない」というのは、相手が援助を求めてきたのに、それをむげに拒否することになるわけですね。だから、彼らは本当は知らなくても知っているように答える。それは嘘じゃないかといえばそのとおりですが、彼らにその意識はないのです。ですから、その点には十分注意する必要があります。

それから最後に有名なハッジ。巡礼です。カーバ神殿のあるメッカに生涯の内一度でいいから必ずお詣りをする。

この巡礼に関しては必ずしも、絶対に行かなくてはいけないというものではありません。たてまえとしては義務付けられていますが、実際問題としては行けない人もたくさんいるので、やったほうがいいなという感じです。ただし向こうの人は、ものすごく貧しい人がテレビもクーラーも買わずにこのことのために貯金して、巡礼に行くというのが実例としてあります。ですからそれをするエネルギーというのは非常にすごいということです。

信仰告白、礼拝、断食、喜捨、そして巡礼。この五つがイバーダート「行」の一番大きな項目です。神様を信じているなら、口だけでなく実践しなさい。そのために何をやるかということがイバーダートなのです。

イスラム教とユダヤ教で共通していることもありますし、全然共通していないところもあります。共通しているのは、割礼です。割礼をしなくてはいけない。

それをさらに発展させたのが、キリストの十二使徒の中のパウロという人です。この人が非常に重要なことをやったのです。新約聖書は、イエス・キリストが、どうしたこうしたというのを弟子の立場からみて書いたもので、マタイ福音書とか、ヨハネの黙示録とかいうものの他に、パウロたちが信仰を説くためにローマ人に出した手紙などといったものも含まれています。

その中にある言葉なのですが、内なる人、外なる人、ということがパウロの手紙にはよく出てきます。これはどういうことかということ、要するに信仰の問題で、戒律よりも信仰のほうが大事なので、神の命令を一分の隙もなく実践すること、つまりイスラム教的な生き方は本当の生き方ではない、人間は心の中で何を信じているかが問題なのだ、ということをパウロは強調したのです。実はパウロが強調した、内なる人というのは、あくまでキリスト教だけのことだったのです。

パウロはユダヤ人であり、ローマの市民権を持っていた市民でもありました。ユダヤはローマに征服されて一種の植民地になっていました。そこでのパウロの生きざまは、ローマの法律はすべて守るけれども心の中の信仰だけは侵されないというものだったのです。ローマの法律がキリスト教は許さないということになった場合に、実際にそうなったわけですが、彼は自分は“外なる人”としては模範的なローマ市民として生きるけれども、“内なる人”としてはキリスト教徒として生きるということをしました。

ところがそれまでこういう考え方をした人はいませんでした。つまり外なる人も、内なる人も一緒になければなりません。キリスト教はまだ国教ではありませんでしたから、この当時のローマ市民は、ギリシャ以来のジュピター（ギリシャ神話ではゼウス）とか、アポロとかの多神教の世界にありました。ですからそれまではローマに限らずどこでもそうですが、ローマの法律は守りますが内側ではキリスト教徒ですというのは絶対許されませんでした。ローマの市民なら、ローマの宗教を信じなさいというのがそれまでの考え方で、そういうふうにならと外を分けるということをはじめて強調したのがパウロでした。この時点ではパウロが考えていたのはキリスト教のことだけだったのですが、それが近代の考え方にまでつながっているのです。

たとえば共産主義者は許せないという人がいます。私も実は共産主義は嫌いなのですが、共産主義を信仰する自由は認めなければいけないわけです。日本の法律を守っている限り、その人が何を信じようが自由なわけです。そこまで干渉してはいけません。共産主義信仰者自体許せないという考え方は、近代国家ではあり得ません。近代国家というのは、**ずっと言ってきた通り、自分と違うものの考え方をする人の考える自由を認める**。そこから出発しているのです。

シーア派とスンニ派

キリスト教は聖典が一つなのに、なぜカトリックとプロテスタントに分派してしまったのでしょうか。カトリック (Catholic) というのは小文字の c で書くと、普遍的という意味です。ですから普遍的ということ、私達がすべて一般的な者であって、**全世界を覆う者であると名乗っていた**わけです。それはおかしいのではないかとということで、プロテスタントというものができました。

つまりシーア派からみると、**スンニ派は正当なカリフの家系であったマホメットの子孫を滅ぼして、かつてにそれを篡奪した奴らの教えである**。つまり**預言者の正しい意志を伝えていないからダメ**なのだというわけです。それに引き換え、われわれシーア派はマホメットと、しかもイラン王室の聖なる血を受けた後継者（これをカリフと呼ばずにイマームと言いますが）であるイマームの教えを得ているのだと主張します。

ところがイマームも実は途中絶えているのですね。何代か続いた後消えたのですが、**イマームは死んだのではなくてこの世の外に隠れていて、いつかまた現れるのだ**というのがシーア派の信仰なのです

スンニ派の主体はアラブ人で、シーア派はイラン人なのです。

アラブ人は、セム・ハム系ですから、差別的な意味ではないですが、我々と同じ有色人種です。

イラン人は白人、ペルシャ人。たぶんこれは推理としてはあっていると思いますが、ペルシャ人は古代文明、四大文明の流れを引いているわけです。彼らは文化的に非常な先進国であり、誇り高い人間であったのが、野蛮なアラブ人たちに征服されてしまった。しかも宗教も彼らの宗教を信じなくてはいけなくなった。その段階でたぶんこういう信仰が起こったのだと思います。

具体的にいえばイマームが王室の血を引いているというのがたぶん味噌だと思いますが、アラブの多数派が信じているのはインチキなのだ、我々のほうが正しいアラーの信じ方なのだ。それはなぜかというと、我々はきちんとしたイマームの言うことを聞いている、そのイマームは元を辿っていけばマホメットの家系とイラン王室の家系につながるのだ、と言っているわけです。

ユダヤ教にはメシア、救世主の信仰がありました。ただしそれはユダヤ人を救うもの、という考えです。それは何によって支えられているのかというと、ユダヤ人は神様によって選ばれた人間であるということ、**選民思想**ということです。

神が選択した民族である。神の意志によって我々を救ってくれるメシアが必ず現れるのだというメシア信仰があった。

・・・

とにかくイエスが救世主であるという評判がたったわけです。ところが、ユダヤ民族がそれを確かめると、彼は軍事的にイエラエルを指導して他の国からの圧迫から救うということはまったく言わないで、「悔い改めよ」とか「右の頬を打たれたら、左の頬を出せ」ということしか言わない。ユダヤ民族は失望したわけです。彼は偽メシアだ、こんなものはどうしようもない、ということで**結局これが彼の死刑につながっていく**わけです。

そういう意味で、イエスこそ本当のメシアであり、神の子である。神が別の姿で現れたようなものである。彼は人類すべての罪を背負って十字架の上で死んでくれたのだ。その死によって人間の原罪というものは贖われたのだ、という考え方が現れました。**キリスト教**というのはひとことで言えば、**イエスがキリスト(救世主)であると信じる**ことなのです。

さらにそこにイスラム教が起こって、マホメットという人が神の声を聞いた。最終的なイスラムの教えである造物主であるアラーの神の言うことを自分は正しく聞いた。これまでの聞き方は不十分であった。系統的にはあくまでもユダヤ教あり、キリスト教あり、そして完全な形でイスラム教ができたという考え方です。

だから一番大事なのはコーランですが、聖書も読まないわけではない。聖書に出てくる大天使ガブリエルは、イスラム教にも出てくる。イエスも預言者として出てきますが、キリストだとは認めない。

ユダヤ教は逆の意味で、自分達の宗教をがっちり守るといふか発展性を拒否する意味で、イエスをキリストとは認めない。まず、中東にユダヤ教があって、キリスト教が出来て、イスラム教が出来たわけです。

・・・

イスラム教はそれとは別の形で、**イエスをキリストとしては認めないけれど、先行する預言者としては認めます**。ただしイエスの聞いた預言ではまだ不完全なものであって、マホメットの聞いた預言が正しい。だから我々が最高に発展した形であるとしめます。

キリスト教徒から見ると、イスラム教徒はキリスト教で終わっているのに余分なものをくっつける、とんでもない奴だ、ということになります。

しかし彼らの神は究極にはいわゆる造物主で、アラーといおうが、エホバの神といおうがいわゆる造物主ということでは同じなのです。この三宗教は造物主を認めているという…では完全に一致しています。この世にどういう形で展開してきたのか、どういう形で神が言葉を伝えたのかということにおいて、この三つの宗教は対立があるのです。**一番大きな違いはイエスをキリストと認めるか認めないかにあります**。

しかし、どう

も儒教や中国の古典に出てくる天というのは、どちらかというところいう人格的な存在ではない。人間を超越した意志も持つ何かなのです。

天罰という言葉がありますね。人間とは別の世界、天に人間を遥かに超越した優れた存在があつて、それが人間を監視、監督している、そういう考え方から出てきたのが天罰です。だから中国人は神という言い方を嫌います。特に神は、儒教では鬼神という言い方をします。

鬼というのは日本語と中国語ではまったくその意味が違います。中国で鬼というのは、日本でいう幽霊という意味です。

儒教は根本的に後ろ向きであるということです。保守的なところ、古の道のみだりに変えてはいけないという枠があるのです。

儒教の一面にはもう一つ**祖霊信仰**ということがあります。祖先の霊を信仰する。御先祖様の霊に祈りを捧げなければならない。その御先祖様に対して一番守らなければならないことは「孝」です。子孫を絶やさないとすることもそうです。子孫を作って先祖のお祭りを絶やさないとことです。先祖供養は、子孫が必ずやらなければならないことです。先祖がいるから子孫がいる。他の人にやって貰うわけにはいけません。だから子孫は必ず作らなければいけません。

これは極端にとらえると男にとって都合のいいことになって、妻が子供を生まなければ離縁してもいい、そして新しい妻を迎えてもいいとか、子供をたくさん作るのが親孝行なのだから、たくさん女がいてもいい。そういうことにもなるのです。「孝」というのはくせものです。

冒「刷り山 m 引叫刊 m リ

「孝」はまた親の意見に忠実であるということでもあります。そして親にはまた、その親がいる。その親にもまた親がいるから、結局、先祖のやり方をみだりに変えてはいけないということになります。たとえば今までこういう服装をしてきたものを、急に変えたりしてはいけません。それは、**不幸(孝)**になるからです。

日本人は「忠」ということをいいます。「忠孝」なんていう言い方をします。「忠孝一致」というのが明治政府の方針だった。つまり「忠」というのは中国語では「義」なのですが、お殿様や王様や自分とは血縁関係のない人に忠実であることを「**忠義**」といいます。親に対して忠実であることを「**孝**」といいます。どっちが重要かといいますと「孝」のほうが大事なのです。

前にも述べましたが、**韓国人は日本人が嫌い**です。その一番の理由に、日本が植民地支配をしていたことがあります

・・・

天皇陛下に対して「忠」であることは、母親に対して「孝」であるのと同じことだ。だから天皇陛下のために銃を背負って戦っているのに母親が病気だからといって帰ってはいけません。

もともと「忠」と「孝」は別のものであるのです。だから字が違うのです。本当は「**忠孝一致**」と言うのは**不自然**なことです。本来は「孝」が一番大事なことなのです。そうであるがゆえに親の遺言に逆らえないわけですから、**保守的になり、反進歩的になるわけ**です。これが**儒教の最犬の欠点**なわけです。

韓国は今も儒教が生きる国

儒教のもう一つの特徴はいわゆる官尊民卑です。そして男尊女卑です。身分制度が士農工商の四段階に分かれます。士というのは本来官僚の意味。

...

士農工商のランクはなぜつくのか。同じものを作る中でも、「農」業は人間にとって一番大事な食糧を作るから国の基本である。だから偉い。「工」業も職人も、食べ物ほど重要な物ではないが、人間生活にとって必要な物を作るから、まあ認めて少しは高い身分にしてあげよう。一番悪いのは「商」人である。商人というのは汗水たらして人が作った物を右から左にただ動かして、お金を稼ぐだけではないか。そういう考え方です。

肉体労働

とか、額に汗して働くとか、椅子を直したり、百姓をしたりすることを、士はしてはいけないのです。士は汗水たらして働くことは人に任せて、国家の大事を考えたり、詩を創ったりするのが大切なのです。額に汗して働くのは卑しい人間のすることであるというのが儒教の概念としてずうっとあります。

日本の学校で掃除当番が教育の一環として取り入れられているのは禅の影響としか考えられません。

儒教というのは保守的で、反近代的であるので、自分で自分のことを変えられないのです。男尊女卑であるから男女共学もできない。淫らなことになるからです。一人一票もできない。

小説家という言葉があります。なぜ「小」なのか。これにはいろんな説があるのですが、「君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず」。つまり君子は付和雷同はしないけれど、大事なときは一緒にものを考える。小人は付和雷同はするけれど、大事なことでは一緒にならない。どうもこの君子に対する小人の言説から「小説」がきているようです。

今韓国で一番問題なのは朱子学の悪影響が残っていることだと思うのです。

...

朱子学をやった人の典型的な特徴は、**自分達は正しい教えをしているので絶対正しい、相手は野蛮人である、という考え方**です。儒学をやっているのは中国人である。中国というのは世界の真ん中の国であるという中華思想。世界の真ん中に花のような美しいところがあって、そこがいちばん偉いのであり、それ以外はみんな野蛮人が住んでいる。これが中華思想ですが、その中華思想をさらに強くしてしまった。

朱子学は特徴として外国のものを認めない。外国人の批判は受け入れない。非常に尊大であって、人の言うことは聞かなくなる。そういう欠点があります。